

国土審議会第8回北海道開発分科会議事録

日 時：平成19年10月10日（水）

場 所：中央合同庁舎第3号館 4階特別会議室

国土交通省北海道局

国土審議会第8回北海道開発分科会議事次第

日時:平成19年10月10日(水)

12:00～14:00

場所:中央合同庁舎第3号館
4階特別会議室

1. 開会

2. 委員紹介

3. 副大臣挨拶

4. 議事

(1) 新たな計画の基本的事項について

(2) 新たな計画に関するコミュニケーション活動について(報告)

(3) その他

5. 閉会

(配付資料)

資料1 国土審議会北海道開発分科会委員名簿

資料2 新たな計画の構成イメージ

資料3 委員から提案のあったプロジェクト等について

資料4 新たな計画に関するコミュニケーション活動について

資料5 今後のスケジュール

参考資料1 計画部会での審議経過

参考資料2 新しい総合計画(案)の概要(北海道庁提出資料)

参考資料3 国土審議会北海道開発分科会関係法令等

国土審議会第8回北海道開発分科会

平成19年10月10日(水)

【二見総務課長】 それでは、ただいまから第8回北海道開発分科会を開会いたします。

本日は皆様お忙しいところをお集まりいただきまして、ありがとうございます。私は、本日の事務局を担当いたします国土交通省北海道局総務課長の二見でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

本分科会は、本分科会に属することとされた国土審議会委員3名及び国土審議会特別委員16名の計19名から構成されております。本日の分科会は、19名のうち現時点におきまして12名の委員の方のご出席をいただいておりますので、国土審議会令第5条第1項及び第3項の規定により成立をしております。なお、2名の委員の先生から遅れて到着するとの連絡を受けております。

国土審議会運営規則第5条及び第1回北海道開発分科会決定によりまして、原則として会議及び議事録を公開することとし、議事録につきましては原則として発言者氏名入りで公開することとされておりますので、あらかじめご了承くださいようお願い申し上げます。

それでは、本日ご出席の委員及び特別委員の皆様のご紹介をさせていただきます。

まずは、丹保憲仁分科会長でございます。

以下、資料1の名簿順で、現時点でご出席の委員の方々からご紹介をさせていただきます。

まず、衆議院の推薦による特別委員といたしまして、金田誠一委員でございます。

次に、参議院の推薦による特別委員でございますが、本年7月の参議院議員選挙が行われたこと及び8月に中川義雄委員が内閣府副大臣にご就任されたことに伴いまして、委員の改選が行われております。

相原久美子委員でございます。相原委員は新たにご就任いただいております。

小川勝也委員でございます。引き続きのご就任でございます。

次に、地方公共団体の長の特別委員といたしまして、上田文雄委員の代理といたしまして、下村市民まちづくり局長でございます。

高橋はるみ委員の代理といたしまして、嵐田副知事でございます。

次に、学識経験を有する委員及び特別委員といたしまして、家田仁委員でございます。

井須孝誠委員でございます。

見城美枝子委員でございます。

櫻庭武弘委員でございます。櫻庭委員は、北島前委員の辞任に伴いまして、新たにご就任いただいているところでございます。

南山英雄委員でございます。

森地茂委員でございます。

なお、このほか、橋本聖子委員、生源寺眞一委員におかれましては、所用のため遅れてご到着されるという連絡を受けているところでございます。

なお、飯島夕雁委員、石崎岳委員、丸谷佳織委員、吉川貴盛委員、岩沙弘道委員につきましては、所用のためご欠席との連絡を受けております。

続きまして、国土交通省の出席者をご紹介します。

まず、松島みどり副大臣でございます。

品川北海道局長でございます。

奥平審議官でございます。

井置審議官でございます。

鈴木北海道開発局長でございます。

また、そのほか、北海道局の各課長、室長等が出席をしております。

これ以降の議事の進行につきましては、丹保分科会長にお願いを申し上げたいと存じますので、どうぞよろしくお願いいいたします。

【丹保分科会長】では、始めさせていただきます。

開始に当たりまして、松島みどり副大臣からご挨拶をいただきたいと思っております。

【松島副大臣】国土交通副大臣として、旧運輸省の所管と旧北海道開発庁の所管を担当させていただくことになりました松島みどりでございます。国会議員になって7年になりますが、国会議員がメンバーである審議会があるとは今まで知らなくて、北海道の地域としての発展に対して皆さんで取り組まれていることの重要性を感じた次第でございます。

早速、先週の金曜日の夜から土曜日まで出張をして参りました。行きましたのは、苫小牧、そして途中、登別に泊まって、室蘭から洞爺湖のウィンザーホテルへ寄り ウィンザーホテルというのはとても私ごときが泊まることができないような高いところなものですから、泊まったのは登別温泉でございましたけれども、その後、宅地としての地価上昇率が2年連続日本一という倶知安に寄りました。私は倶知安という地名は聞いたことがあるけれども、どこにあるかは知らなかったのですが、ニセコ町の隣で、雪質のいい有名なニセコスキー場がある。オーストラリアの方からの人気も高く、そこで視察したところは上昇率が1番のところとは違うんですが、ペンションがどんどん増えて、何と坪50万円で売り買いされているというところを見せていただきました。

北海道について、私が最も印象的に記憶しておりますのは、今日は北海道電力の南山会長がいらっしゃいますけれども、昨年6月、自民党の経済産業部会長として建設中の泊原発を視察に行きました。全国どこでも原子力発電所というのは、風光明媚だけれども、かなり交通の便の悪いところに立地しているものなのですが、泊もそのような場所で、視察を終えて札幌に帰る途中、高速道路に乗り、小樽、札幌に差しかかって、そのとき、同じ北海道と思えないほどの人口の集中ぶりを感じたことです。最近、よく都市と地方の格差

と言われますけれども、北海道の中の格差、札幌圏とそれ以外の地域との大きな差を感じた次第でございます。

その前、法務委員会の委員として旭川に視察に参りました。当時、民主党の筆頭理事の方が旭川弁護士会所属の現職の弁護士さんだったものですから、旭川に参りまして、北海道における弁護士さんのいらっしやらない地域、弁護士過疎の問題についても伺いました。稚内には、地検の検事正を務めた方が、退官後、弁護士となって行かれたという感動的な話を伺いましたが。あるいは沼田町におきまして、少年院に入っていた子どもが出てきた後、社会復帰をするために農業を学ぶ、そういうところを沼田町のご好意でつくったという話も聞いております。これまで、それぞれの地域の懸命な努力を、心に留めてまいりました。

先週の出張で参りましたのは、どちらかといえば勝ち組とっていいところでしょう。洞爺湖はサミットを機に伸びようと、また、倶知安やニセコはソフトの面で知恵を出している。さらに苫小牧で思いましたのは、昭和20年代に建設を始めた港が、今やっと満杯になって、そして内航海運で貨物量が一番多い港となっていると知りました。社会資本整備を長年かけて充実させるハードの部分と、知恵を出し合ってニセコのような成功を収めているソフトの部分とを見せていただいていたんですけれども、うまくいっているところはやはり数少ないのではないのでしょうか。

国会で今、最も論戦になっている都市と地方の格差というときに、失業率の問題、有効求人倍率の問題を取り上げて、北海道が最も大変なところではないかと感じております。

苫小牧のトヨタ自動車北海道も見学したのですが、3,124人雇っているうち1,000人ぐらいが期間工、6ヶ月から最長3年の期間工だと伺いましたので、もっと正社員を増やしてほしい、と注文をつけましたところ、毎年何人ずつは正社員に登用している、という説明をされていまして。ところで、従業員3,124人というのは北海道の製造業で一番大きな工場だということでした。次は、デンソーが千歳に立地するようですけれども、こういった工場の立地が本格的に進んで、裾野の広いものになれば、北海道は頑張っていくことができるのだらうと感じた次第でございます。

私自身は大阪に生まれ育って、東京で選挙をやっている人間でございますけれども、これを機会に、皆様方のご意見をいろいろお伺いして、北海道がもっと元気になるよう、政策を進めてまいりたいと存じます。皆さんに今、計画を立てていただいているところで、年明けには計画ができ上がると伺っております。皆様のお知恵が反映したすばらしいものになるように念願しております。

長話をして申し訳ございませんでした。これからもよろしく願いたします。(拍手)
【丹保分科会長】北海道をたくさん見ていただいて、感じていただいているようでございまして、本当にありがたいことだと思います。

前回、第7回の分科会を4月にさせていただきました。新たな計画に向けて国土交通大

臣から諮問をいただきまして、森地委員が国土審議会の会長代理でもいらっしゃるもので、森地先生においでいただきまして、この会が動き出しました。

計画部会をつくらせていただきまして、南山委員に計画部会の責任者をお務めいただき、何回も何回も繰り返し議論を進めていただいております。それは基本政策部会の報告が前にございますので、それを受けて、次にどのように展開するかということで物が動いているわけでございます。北海道開発 開発という言葉がいいのかどうかいろいろ議論はありますけれども、ディベロップメントということであるならば、大きさが変わるのではなくて、質が変わるということを含めば当然の経緯だと思いますが、その理念、目標をどうするかということが1つ、それからもう1つは、今、副大臣からお話ございましたように、産業の厚みというもの、産業はあるけれども、厚みがどうであるかということが恐らく非常に重要なことであろうと思います。製造業がなかったということもありましたけれども、農業の厚み、林業の厚みというのは大変な努力の上で、なおかつなかなか達成されない。この厚みをどうするか。

そしてもう1つ、北の端にいますけれども、日本はアジアとつながって生きていくしかなくなってきつつある中で、アジアとの連携をどうするか。残念ながら北の方がまだ若干ふさがっております。北朝鮮、沿海州、戦前であれば新潟、小樽なんていうのはその玄関口であったんですけども、それがなかなかいかない。今日は家田さんがいらしておりますけれども、樺太は当然の北のパイプの根っこだったのでございますけれども、それも必ずしも太くはない。油が出るようになりまして、いろんなことが起こりますが、並んでいろんな問題も発生しております。そういうことをどうやって対応していったらいいだろうか。どっちにしても、北海道はどうやって生きていくのだろうかという基本的なことを考えたいということで、今までの延長線上ではない。グロースではなくて、ディベロップメントということをどのように考えるかということでご議論いただいております。

7月の計画部会を受けまして、南山部会長の下で基本的にどう考えるか、今日はまず最初の議題でございますけれども、そのことについておまとめいただきました。そして、個々の問題をどのように処理していったらいいのだろうかということも並んで参りました。まだ全部議論が終わっておりません。基本的なものを含めての議論を今日はいただきたいと思っております。案文の作成を今部会の方で鋭意ご議論中でございます。したがって、今日はその途中経過までは多分お話しいただけるのだらうと思いますけれども、まだ中間段階であると。分科会でご議論いただいて、部会で逸脱した議論が行われないように、分科会のサポートをしっかり受けて議論をするということで、今日の分科会を開かせていただきました。これからも可能な限りご出席いただきまして、ご議論いただきたいと思っております。

それでは、全体の流れはこんなことでご理解いただいた上で、議題の1番目に入りたいと思います。

まず、基本的なものからでございますが、計画部会でご議論いただきました、南山部会長のご説明をまずいただきたいと思っております。よろしくどうぞお願いいたします。

【南山委員】計画部会の部会長を仰せつかっております南山でございます。

部会の審議状況等についてご報告したいと思っておりますが、資料2の「新たな計画の構成イメージ」というものがございます。それともう1つは、参考資料1の「計画部会での審議経過」をご覧になりながらお願いしたいと思います。

最初に、部会での審議経過ですけれども、参考資料1の一番最初の紙のところにあらかたのことが書いてございます。先ほど分科会長からお話がありましたように、第7回分科会の議論を受けまして、5月に第1回の計画部会を開催いたしました。以後、ここに書いてありますように、4回にわたって審議を行ってきております。特に東アジアとの連携、あるいは産業の厚み、さらには多様な地域の姿、こういったことに焦点を当てながら議論を進めてきております。

第3回の部会では、三井物産戦略研究所の寺島所長にも参加をいただきまして、具体的な施策の検討を行って参りました。7月の第4回部会、ここでは基本的事項、全体の議論を行いまして、先ほどお話ししました資料2の「新たな計画の構成イメージ」を取りまとめたところであります。その第4回の席で私の方から、計画の文言の起草委員を指名させていただきまして、現在、案文の作成に鋭意取り組んでいるところであります。

次に、基本的事項であります「新たな計画の構成イメージ」の全体構成について簡単にご説明をしたいと思います。資料2の一番上にあるレジュメ的な紙をご覧になっていただければと思います。

これが全体構成で、4章構成になっております。第1章と第2章が開発の意義、戦略目標に関する部分で、いわば総論に当たる部分であります。第3章は主要施策、第4章は進めるに当たっての考え方、これがある意味では各論に当たる場所であると言えます。

第1章の「計画策定の意義」につきましては、部会においていろいろご意見がございました、北海道開発が国にとってどういう意味、意義があるのか、あるいは国民にとって開発計画とは何であるかといった点をきちんと書かなければいけないという議論がございました。そういったことも踏まえて、第1章の箱の中の右側の上の方にありますとおり、北海道開発の意義というのは、我が国が直面している課題の解決に貢献をすること、先駆的・実験的な取り組みを行うこと、さらに北海道の活力ある発展を図る、この3点ではなかろうかと思っております。さらに、開発計画そのものの持つ意味というのは、この北海道開発計画の意義を踏まえて開発にどのように取り組むか、こういったことを明確なビジョンとして内外に示すものであるという位置づけにしております。

第2章に「計画の戦略的目標」であります。ここでは、我が国を巡る環境変化と国家的課題、それから北海道の資源・特性、これを踏まえて、北海道開発の意義を具現化する際の戦略目標としてこの3つが書いてございます。食の供給基地、森と水の大地、地域力あ

る広域分散社会という出だしがあって、具体的なところでは食の供給基地というのは、こういうことに象徴される競争力ある北海道の実現、その次が持続可能で美しい北海道の実現、その次は多様で個性ある北海道の道内各地域の発展、この3つを戦略目標として掲げているわけであります。

さて、その目標の実現に向けた施策としてどういうことを考えていくかということで、5つの主要施策、カテゴリーを第3章に掲げてあります。1つ目は、グローバルな競争力ある自立的安定経済の実現ということで、主に産業に関係する部分であります。東アジアの連携、あるいは産業の厚みといった点の検討を踏まえて取りまとめているところであります。

これをさらに大きく3つの分野に分けております。食料供給力の強化と食に関わる産業の高付加価値化・競争力の強化、国際水準の観光地づくりに向けた観光の振興、東アジアと共に成長する産業群の形成、こういった大きく3つであります。

2つ目の主要施策は、地球環境時代をリードし自然と共生する持続可能な地域社会の形成ということで、自然との共生、あるいは循環型社会、低炭素社会の形成という環境に関する施策を取りまとめることにしております。

3つ目の主要施策は、魅力と活力ある北国の地域づくり・まちづくりということで、地域構造、あるいは地域特性をいろいろ考慮した多様な地域の姿について検討を行い、それを踏まえて都市部における機能の強化、あるいは人口密度の低い地域の取り組みなどに対する施策をまとめております。

4つ目の主要施策は、内外の交流を支えるネットワークとモビリティの向上ということで、新幹線とか道路、港湾、航空といったいわゆる交通ネットワークに関する施策であります。

最後に、5つ目の主要施策は、安全・安心な国土づくりで、頻発する自然災害に備える防災あるいは減災対策、こういったことに関する施策であります。

こういった施策を効果的に推進していくために、第4章の「計画の進め方」について、3つの基本的な考え方を立てております。

1つ目が、ビジョンの共有と多様な連携・協働、2つ目が、新たな時代を見据えた投資の重点化等、さらに、新たな北海道イニシアティブの柱を最後の3つ目に置きまして、北海道らしさを際立たせるということにしております。

最後に、委員からのプロジェクト等の提案について触れておきたいと思います。これは資料3に「委員から提案のあったプロジェクト等について」がございます。中身については説明はしませんけれども、新しい計画の基本的な考え方、あるいは目指す方向、これを端的に、象徴的ないしは総括的に示すプロジェクトを明確な形で提示していくことが計画の基本的な考え方を理解していただく上でも有用ではないかと考えまして、こういう趣旨から、私から第3回の部会で各委員の皆さんに提案をお願いいたしました。短時間ではあ

りましたけれども、ここにご覧になっていただくように、皆さんからたくさんの提案をいただき、第4回の部会ではこれの議論も行ったところであります。

なお、事務局では、提案のあったプロジェクトの中から、既に平成20年度の概算要求に盛り込む等々で、4つぐらい取り組みに着手したと聞いております。今後、これらをどういう形で提示するのが適当であるか、さらに検討していきたいと考えております。

今日の分科会でもいろいろとご意見をいただき、部会での検討に生かしていきたいと思っております。

それでは、事務局から詳細をお願いいたします。

【松島副大臣】先ほど一言言い忘れたのですけれども、櫻庭会長のお顔を見て思い出しました。北海道のスケトウダラが韓国の高級チゲ向けに輸出されたり、帆立貝がEUに輸出されているとの水産業界のがんばりを伺って、大変感動いたしました。私は大好きなサンマを最後の日に、飛行機に乗る直前に2匹、大急ぎで食べて帰って参りました。第一次産業も頑張ってください。これで先に失礼いたします。

(松島副大臣退席)

【高松参事官】参事官の高松でございます。

先ほど部会長からご説明がありまして、資料2に「新たな計画の構成イメージ」といたしまして、第1章、第2章として総論的なものを前段に置き、第3章、第4章で各論として具体的な施策を、柱に沿った形で記述していくというような計画の構成を想定してございます。

少し詳細にご説明させていただきたいと思いますが、総論に関する部分は次のカラーの1ページ、2ページでございます。全体の書き方といたしまして、北海道開発の経緯、ある程度歴史的なものから現状に至る状況をまず説明しております。その歴史的な流れを踏まえた中で新たな計画の意義ということで、先ほど部会長の方からありまして、基本政策部会報告などでは、我が国が直面する課題に貢献するといった部分を強調してありますが、少し計画の後段の中身についても充実を図っていくこと、あるいはこの計画の意義、北海道開発の意義というものを色々な観点で国民に説明していくという趣旨から、北海道が新たな時代の先駆者としてフロンティア精神を発揮し、持続可能な経済社会づくりのための先駆的、実験的取り組みを実施していくということを意義に付け加え、さらに北海道の地域特性を踏まえた独自性のある地域展開を図る。全国で作っております国土形成計画の北海道の広域地方版としての機能、役割もこの計画に持たせていこうということで、この意義につきましてこの3つを記述させていただいて、以下、施策を書き進んでいくということを想定してございます。

次のページで第2章では、今まで計画の目標や方向性について議論を行ってきたところでございますが、その計画の目標を2ページの下のところの3つにまとめております。この目標を定めるに当たって、1つは北海道を巡る、あるいは我が国を巡る環境変化、国家

的課題というところから書き始め、北海道の地域資源のところはどういった地域資源・特性があるかを踏まえた上で、戦略的目標として3つ掲げているところでございます。

先ほど部会長の方からもありましたとおり、食の供給、競争力ある北海道の実現ということで、どちらかというところにかかわる目標が1点。

2つ目の目標として、環境あるいはエネルギーといった観点から北海道の地域資源として特に強調できるものとして森と水、この2つを掲げさせていただいております。そういった特徴を使いながら、サステイナブルな美しい北海道を実現していくのだという戦略的目標が2つ目です。

3つ目といたしまして、地域力ある広域分散型社会、多様で個性ある各地域の発展ということで、1つは、それぞれの地域が多様で個性的な地域の姿を実現していくべきであるという考え、それから北海道が元々広域分散型の社会構造をなしており、さらにその広域分散に対して人口減少とかいう問題が加わっていく。そのような中で、広域的な生活圏をどのように形成し、あるいは維持し、形成していくのかという観点。それから、人口減少、少子高齢化、こういったことに対する地域社会としてのモデル的な取り組みを行っていくということを含めて、3つ目の柱を整理いたしております。

この3つの戦略的目標、いずれも大きな目標、課題に対する挑戦であります。21世紀前半期を展望しつつ、おおむね10年間をこの次の計画の期間として考えたいということで総論を終えております。

それから、次の3ページ以降は、今度は各論の部分でございます。1つ目の各論の施策のうち、1つ目のグローバルな競争力ある自立的安定経済の実現で、食料の供給、国際水準の観光地づくり、観光の振興、3つ目として、東アジアと共に成長する産業群の形成ということで、全体、かなりのボリューム感がありますが、3～4ページの2枚にまたがっております。

食に関しましては大きな柱が2つで、1つ目の柱としては食の供給力を強化していく。2つ目の柱として、食に関わる産業の高付加価値化・競争力を強化していく。こういう2つの柱を想定してございます。とりわけ食の供給力に関しては、農に関するところ、それから水産に関するところ、少し視点が異なっているということもございまして、農と水産は書き分けるということを今検討中でございます。

4ページ目のところに参りまして、観光に関するところでございます。観光地づくり、あるいは観光の振興という観点で取り組みの方向性に分けてございます。1つは国際水準の観光地づくりということで、これは観光スポットの点的な観光地づくりというよりも、もう少し広域的な北海道全体が観光地であるということ想定した観光地という言葉の使い方でございますが、色々な観点での観光地づくりを総合的に取り組んでいくという柱が1つ。

それから、この観光というものが北海道の中においても、経済という観点で見ても大き

な役割を果たしていくということから、産業的な観点からの施策をまとめていきたいということが2つ目の柱でございます。

4ページの下のところに参加しまして、東アジアと共に成長する産業群の形成でございます。東アジアに関しては、基本政策部会の中でも相当いろいろご議論させていただいたところがございます。とりわけ新たな地理的優位性ということなどもございまして、1つ目の柱として、産業育成に向けての条件整備ということで、とりわけ今、東アジアの各地域の成長、その辺とのシームレスな物流実現のためのハード・ソフトにわたる諸施策、それに関連づけているんな北海道が持つ地理的優位性も含めて、そういったものを生かした産業立地を進めていくということ、それに絡めて、地域開発もさることながら、人材の育成、あるいは資金、投資の問題、こういうことまで含めて条件整備をしていくという柱を1つ設けました。

それから、強みを活かした産業の育成ということで、例示としてIT、バイオ等、「等」には下のところがございますとおり、環境・エネルギー産業関連を特出ししてございます。それから、森林、これは環境面にもございますが、産業という視点でも森林を大きく取り上げているということもございます。

次に5ページのところでございますが、これは「地球環境時代をリードし自然と共生する持続可能な地域社会の形成」という大きなテーマでございます。取り組みの方向性としたしまして3つの柱を想定しております。自然共生社会の形成、循環型社会の形成、低炭素社会の形成でございます。とりわけ国といたしましても、この環境面ではいろんな閣議決定などがございまして、国際的、あるいは世界が注目している低炭素問題、低炭素社会の形成ということでこの用語を使わせていただいております。そのイメージとして、北海道の持つ環境の本当の自然というものもございしますので、施策の並びの順番としては自然というものを一番に掲げ、それから循環・低炭素社会の形成、こういった順番で整理させていただきます。

自然共生という観点では、自然環境を保全するというのもございますけれども、とりわけ景観、あるいは自然と触れ合うスペース、こういったものを形成し、自然を利活用していくという視点を入れさせていただいております。

それから、豊かな自然をはぐくむ意識の醸成、それからこのところにアイヌ文化ということも入れさせていただいております。

その自然の中で森林については特出ししてまとめているということで、自然共生社会については4つの柱を今想定しております。循環型社会につきましては3Rの推進ということでございます。

低炭素社会の形成ということでは、CO₂の問題がございます。この低炭素社会に向けては、新たなエネルギーをどう見出していくのか、どうやって効率的にCO₂を排出しない社会にしていくのか。吸収源対策として森林あるいは緑化など、こういう問題をこ

こで整理することを想定しております。

次に6ページのところでございますが、地域づくり・まちづくりについてでございます。ここが相当なボリューム感のあるところでございます。

1つは、地域づくり・まちづくりのまとめ方といたしまして、1つ目の柱として、広域的な生活圏の形成と交流・連携強化等と入れさせていただいております。6期計画では、後ろの方にそれぞれの地域版みたいなものをつくり、6圏域それぞれで何を整備するかということを書いておりますが、具体的に何を整備するかというよりも、生活圏の形成をどうしていくのかという考え方をこの3節の中に盛り込んでいくということで、生活圏の形成について1つの柱を想定しております。

それから、北海道に隣接する地域等との連携ということで、青函、ロシア、北方領土等についてのまとめをこのところに入れることを想定しております。また都市の問題、人口低密度地域における地域社会づくりを取り上げることを考えてございます。

さらに、7ページのところでネットワークとモビリティの向上でございます。1つは広域的な交通ネットワークの構築ということでございますが、ここも部会の中で議論がございました。ある程度北海道の中のネットワークというものをまずしっかりつくっていく。そして、その北海道の中のネットワークを外とつなげていくという観点で、施策を列記してございます。

それから、まちなか交通体系ということで、これはまちづくりと一体的な交通体系の再生、あるいは冬の問題がございまして、冬期交通の信頼性向上をこの中に取り入れたいと考えております。

8ページで、安全・安心な国土づくりでございますが、ここは頻発する自然災害に対する防災対策の推進という観点と、ハード・ソフト一体となった総合的な取り組み、さらに交通事故の問題、この3つを取り上げてございます。

9ページでございますが、第4章は計画の進め方ということで、部会長の方からもご説明がございましたとおり、連携・協働、投資の重点化、北海道イニシアティブ、このようなことで進め方それぞれ工夫を行い、こういう取り組みを行うことによって効果的に施策を推進していくということで全体の構成をまとめていきたいと考えているところでございます。

以上、資料2を使いまして、全体の構成イメージについて少し詳しく説明させていただきました。

【丹保分科会長】ありがとうございました。お手元の資料2をずっと見ていただくと、大体今議論されていることがわかりいただけだと思います。

これからご意見をちょうだいするのを2つに分けて、資料2の中で1章と2章、計画策定、総論、つまり北海道のこれからの開発 開発という言葉はどう使うか、先ほどちょっと私が申し上げたディベロップメントということで質的变化を含めたもので、恐ら

く日本で、エネルギーだけをちょっと除けば、今のところ自立できる唯一の地域かもしれませんが。それが将来、日本の人口が減っていくときに、どういうリーディング・ワイヤーになれるかということが多分問われているのだと思いますけれども、その戦略目標をどのように我々はとっていったらいいのだろうかというのを、今、1章と2章で部会長と参事官が説明したことでまとめられております。

そして、その個々につきましてはかなり分厚いものですが、3章、4章で個々の問題をどのように取り扱うかという議論がなされております。したがって、できればこの1章、2章、全体の見方を先にご意見をいただいて、そこをもう一度頭の中に置きながら、3章、4章の個々に上げたものがそれでいいのかなという議論に行きたいと思うんですが、そんな流れでよろしゅうございましょうか。

もしお許しただければ、まず1章、2章の総論的なもの、北海道開発の経緯は在来のことですが、総合開発計画の意義、現代的意義は何なのだろうか、そして、今我々が置かれている状況はどうなのだろうか、その中で何を目標に取り上げたらいいのだろうか、こんな順に書かれているのでございますけれども、どなたからでもどうぞご意見をちょうだいできればと思います。どなたでも、どうぞ口火を切っていただけますか。

家田先生は委員で加わっていただいているんですね。

【家田委員】はい。参加させていただいておりますけれども、まずはほかの委員の方のお話を承るのを楽しみにしている次第でございます。

【丹保分科会長】そうですか。それではどなたからでも、嵐田副知事、総括的にやっていらっしゃるようですから、道の動きと絡めて嵐田さんの意見を聞かせてもらえますか。

【高橋委員代理（嵐田副知事）】後ほど、参考資料2を簡単にご説明させていただこうと思っていたのですが、今でもよろしいですか。

【丹保分科会長】今でも結構ですよ。どうぞ。

【高橋委員代理（嵐田副知事）】では、簡単に。国の計画の第1章、第2章については、参考資料2として配付させていただいております道の「新しい総合計画（案）の概要」の基本構想編・第1章と大体共通するのかなと思ってございます。

道の総合計画につきましては、この分科会の計画部会が7月末に開催されたときに、原案をご説明させていただきました。その後、道議会第3回定例会を経て、計画（案）となりまして、明日から道議会での集中審議が始まります。そういった意味で、これは現時点での新しい総合計画（案）の概要でございます。

1の「計画策定の趣旨」としては、今後四半世紀を展望しつつ、北海道が目指す姿と進むべき道筋を明らかにすることとさせていただきます。

2の「計画の性格」としては、道政の基本的な方向を総合的に示す計画であり、具体的には産業や教育等、別に策定する分野別の計画等によって推進することとさせていただきます。

3として、計画期間は国と同じになると思っておりますけれども、平成20年度からのおおむ

ね10年でございます。

計画の柱としては大きく「基本構想編」と5ページからの「ほっかいどう未来づくり戦略編」という大きく2つから成り立っております。今、丹保分科会長からご質問のございました国の計画の第1章、第2章関連では、第1章の「時代の潮流と北海道」として、まず、時代の潮流を大きく3つとらまえ、その中で「北海道の展望」を右のように記述しております。そういった意味では、国の計画の第1章、第2章については、北海道の計画の考え方と基本的には違いはないのではないかと考えてございます。

2ページ目、第2章の「めざす姿」でございますけれども、北海道としては、めざす姿として、ゴシックで書いてございますように、「人と地域が輝き、世界にはばたく、環境と経済が調和する北海道」ということで、下に書いてございます「世界に躍進する産業」「ゆとりと安心のある暮らし」「個性と活力に満ちた地域」という3つの観点からそれぞれのめざす姿をまとめているところでございます。

中段の第3章の「政策展開の基本方向」としては、経済・産業、暮らし・ライフスタイル等々、一番下の社会資本まで、5つの分野に区分をしまして、今後10年先を見つめて、例えば民間需要に支えられた力強い経済の構築等の14本の柱を政策の柱として掲げてございます。

主な取り組みとしては、お配りしている計画(案)本体の中に、120の取り組みを書いてございます。これらについては後ほどご覧いただければと思っております。

計画の原案から変えた点をご紹介させていただきますと、ご承知のとおり、北海道はいろいろ全国的にご迷惑をかけたミートホープ、石屋製菓など食の問題がございましたので、食品の安全確保対策を少し詳述したこと、北方領土対策を1つの項目立てをして記述したこと、美しい景観づくりを項目立てして記述したこと、条件不利地域における情報ネットワークの整備等について書き加えたことなどがございます。

3ページに行きまして、北海道は国の計画とは若干違うのかなというところもあるのですが、道政の基本方向を示すということで、第4章の中で「地域づくりの基本方向」という柱を1つ立ててございます。その中では、持続可能で活力ある地域づくりを推進するに当たって3つの視点から基本的な考え方を整理し、こうした地域づくりを進めていくため、2の「計画推進上のエリアの設定」で、拠点性の高い中核都市を核とした道南、道央、道北等6つの連携地域という概念を導入いたしまして、それぞれの特色を生かした地域づくりを進めていくこととしてございます。

若干余談になりますけれども、この連携地域との関連で、道議会で新しい支庁制度の議論がいろいろあったところでございます。支庁制度改革については今後の議論を待つということでございます。

4ページに入りまして、3の「地域づくりの手立て」といたしまして、6つの連携地域ごとに政策展開方針を策定して、この計画の実効性を担保していくこととしてございます。

計画原案に比べますと、6つの連携地域ごとにその地域の進むべき方向性をかなり書き込んでございます。

5ページに入りまして、「基本構想編」と並んでもう一つの柱であります「ほっかいどう未来づくり戦略編」として、この計画をより確実に、より効果的に実現するために、資金、人材、情報などの政策資源を結集して取り組むテーマを絞り込んで、その道筋、手だてとして、8つの戦略を掲げているところでございます。

6ページに入りまして、一番下の「計画の推進」でございます。計画の推進に当たりましては、パートナーシップ意識の醸成などにより、多様な主体との協働で進めていきたいと考えており、また、効果的な推進に向けて、約60の具体的な数値目標を掲げてございます。そして、分野別の計画や地域ごとの政策展開方針等に沿って進めて参りたいということでございます。

何とか年度内には計画を決定いたしまして、20年度からスタートさせたいと考えているところでございます。

【丹保分科会長】どうもありがとうございました。いろんな議論をするために、道が今何をやっているかということが非常に重要な下敷きになりますので、ありがとうございました。

それではまた元へ戻りまして、北海道総合開発計画、道の計画を頭の中に置きながら、これから何をベースにしていくかという資料2の3節、食の供給基地、森と水の大地、広域分散型社会　これは人口減少化の社会をどうつくるかという、恐らく日本のトップモデルになるような議論がここに出てくると思うんですけども、こういうのを含めまして、どうぞどなたからでもご議論いただけますか。

森地先生、総合的に何かご発言いただけますか。

【森地委員】参事官からお話がありましたように、今回の計画は全国の国土形成計画に相当する部分と広域地方計画に相当する2つのミッションがあって、その広域地方計画に相当するかなりの部分はこの道の計画なのではないかと理解をしております。ただ、この中で、総合計画に沿って別に策定する分野別の云々とあって、産業、保健、こうなっていますので、広域地方計画が各地域でどういう制度まで落ちるかというのに係りますが、ここではそういう多重形になっているということはかなりはっきりしておかないと、誤解を受けるかなという印象を持ちました。

私自身は、国土形成計画をお手伝いしている関連で言いますと、広域地方計画はかなり具体的で、特に例を挙げて申し上げれば、社会資本整備もそれぞれの地域戦略とどう結びついて、どういう効果があって、したがって、ここではこういうことをやるんだというシナリオをイメージしているんです。特に重要なことは広域圏、つまり北海道としてアジアの中でどんな特性を持っていて、どういう戦略を持つのかということが1つ。もう一つは、人口減少の中で、山間地も含めてどういうサービスを広域で確保するのかという、ここが

一番のポイントではないかと思います。そういう意味では、今、道のお話をいただいたところで、この6つの広域圏で北海道が多様性を持って、特色あるようにしようというのは大変すばらしいアウトプットだと思うんですが、これをブレイクダウンした、どういう生活を維持するのかという話がもう一つ、多分各論で出てくるような気がします。そんなことが1点です。

もう一つは、やっぱりロシアとか、近隣の話が表に出っていますが、それはどうも違うんじゃないかと私は何度も申し上げています。北海道の位置づけをアジアの北だけでやるという話は間違っているんじゃないかと私自身は思っております。もっとアジア全体の中で北海道の特色を発揮するというふうに位置づけるべきで、近間でだんだん広げていくような発想はどうも違うんじゃないかと。率直な意見でございます。失礼しました。

【丹保分科会長】全国計画との整合性の説明をここでちゃんとしたことはまだないですよ。それはどうでしょうか。次回あたりに、それとも今何か、森地先生がお話くださったことが大体の位置づけなんですけれども、もう少し具体的に、ほかの圏域がどういうことを森地先生の下でやっているかということをも1回情報として皆さんにお流しした方がいいんじゃないかなという気はしますけれどもね。

【高松参事官】補足になるかどうかわかりませんが、全国の国土形成計画は、全国版については私どもの北海道総合開発計画と作業スピードが似てきまして、国土形成計画の全国版と北海道総合開発計画の作業のスピードがほぼ同じようなスピードで進んでおります。全国版の国土形成計画ができてから、今度は具体的にそれをブレイクダウンするような広域地方計画の策定が全国の各地域でこれから始まっていくという状況でございます。恐らく1年先ぐらいの作業を今我々がやらなければいけない、こんなところが求められていると考えております。そういう意味では、先駆的・実験的取り組みをこの中でやらせていただいているということなのだろうと思います。

全国計画の方も、シームレス・アジアなど、いろいろ新しい考え方が出ておりまして、可能な限りそういうものも横目で見ながら、北海道の特徴を出し、構成イメージを検討させていただいているところでございます。どれだけ具体的なものになるのかについて、引き続き勉強しながら作業を進めていきたいと思っております。

【丹保分科会長】分科会や部会に、全国の北海道外の情報もある程度出していただいて、ぜひお願いします。

【南山委員】森地先生からお話がありましたが、東アジアの近隣だけを見ているという印象を受けるというお話がございましたので、部会の議論に関連してそれだけ補足させていただきたいと思っております。

表題はそういう感じになっていますけれども、実際の議論は近隣だけではなくて、むしろ北米、アジアの中国大陸、あるいはその南まで含めた、そういう地政学的な位置づけ、あるいは地理的な位置づけの中で北海道がどういう位置づけにあるかということをお考え

て、端的に言うと、中国の上海からシアトルまで真っ直ぐ線を結んだらちょうど津軽海峡を通るとか、そういうことを視野に置いた考え方で物を取り組んでいくべきだということで、資料2の4ページに「東アジアと共に成長する産業群の形成」、グローバル化云々と書いてあって、「産業群の育成に向けての条件整備」と書いてありますが、このところは比較的端的に、2番目のところに「北海道が持つ、北米、東アジアとの結節点に位置し、ロシア極東地域にも隣接している」という、周りの関係のあるところを全部にらんでということで議論はなされていました。補足させていただきます。

【丹保分科会長】ほかにございましょうか。北海道はちょっとほかの地域と違うのかもしれないというのは、札幌が一極なんですね。東京と東京以外の日本みたいな感じで、札幌と札幌でない北海道、札幌外でも、道東と道北、道南では全く違うんですね。それをどのように見るかというのはかなり基本的な議論だと思います。

それから、人口が減っていくということが当然のことながらありますし、札幌は減らないんですね。札幌がほかの地域とどのように組んでやるのかという議論もまだちゃんと行われていません。政令指定都市ですから、それなりの自立性を持っているんですけども、とって、北海道の中で札幌を抜いた議論はあり得ませんから、それをどうするかという話ですね。

東京都と関東という感じでしょうか、さっき嵐田副知事の説明の中にあった中で、浦河、日高、岩内までが道央圏なんですね。そうすると、札幌と日高では随分違うので、これは関東地方における東京と群馬みたいな感じになるんでしょうか、やはり影響は受けませんが、では、道東とどう違うか。これはいろいろ理由があっただろうと思いますし、これからもなると思うんですが、札幌と札幌でない地域というのを頭の中に常に置いて議論しませんと、処方せんが違うのだらうと思います。そのときにどのように考えていったらいいんでしょうか。これはぜひこれから、こういう具体のことをやっていくときにと思います。

森と水と大地、食、いろいろありますけれども、これは違う地域が中心ですし、人口が減ったときにいろいろなことをやっていくときに、ここであまり議論をしていないんですけども、教育の問題が一番大きい将来問題になるんじゃないかと何回か議論をしているんです。東京はもう近代を過ぎてしまった都市だと思いますけれども、近代化を必死にやっている地域とリエゾンしながらグローバリゼーションを進めていくことのできる地域というのは、まだ分業といいますか、それぞれの分野別のアクティビティが十分に有効なんですね。ところが、地方へ行きますと、分野別なんていうことはほとんどなくて、それをどうやってみんなが支え合うかということでないと、コミュニティすら維持できないという非常に難しい状況になっていて、それに対するきちっとした処方せんがとれていない。では、札幌はどうなんだという問題が出て参りますね。

ですから、教育体系自体を入れたって、総合型の教育をしなければならない教育と一点

突破をやれば何か産業ができるというような時代、これはいろいろな場所があって、日本はちょうどそのターニングポイントを回っているのだと思うんです。北海道は多分少し早めに回るのでと思いますね。なおかつ自分自身が生きていける食いはありますから。200%を超えているのは北海道しかありません。エネルギーを何とかすることができれば一番安定した地域なはずなんですけれども、それをどのように我々を見るかという問題がありますので、これからご議論いただくときに、この計画の戦略目標というのを、北海道はどうかということと同時に、札幌と札幌でない北海道ということをきちっと頭の中に置いて議論をしていかなければいかんのかなと思っているんです。

座長が勝手なことをしゃべってははいけませんので、どうぞどなたかご発言いただけませんか。全体問題として議論をされてきた中で、家田先生、ちょっと整理をしていただけますでしょうか。

【家田委員】機会をいただきましたので、発言させていただきます。

先ほど丹保先生も森地先生も高松さんもおっしゃった話ではあるんですけれども、タイミングがちょうどこの全国バージョンがある種の議論がなされ、全国バージョンの中にかつてはつくられてきた具体ではなく、地方バージョンの中で具体を攻めるという格好に津軽海峡以南はなっているわけですよ。そういう中で見ると、やっぱり北海道開発はまた別の法体系ではありますけれども、極力具体を出さないとあまり納得されないんじゃないかなという感覚を持っております。

そういう意味で、私自身を含めているんな方がいろんな提案をして、具体的なプロジェクトを挙げてみたりしているところなんですけど、また、理念もこうやって集約しているところなんですけど、ともすると総花になるんですよ。これはどういうものでもそうなんですけれども、総花になるんです。でも、やっぱり総花では国民はもうついてこないということは明らかなんです。だから、いっぱい書いてあるんだけど、目玉を1個上げたら

1個は難しいにしても、10個上げたらどれなのという、ハードではこれとこれだけれども、新しい制度は北海道独自のものとしてこれを提案するよとか、あるいは活動プログラム、運動論としてはこれとこれをやるよとか、せめてハードと制度と運動論、このくらいのが3つずつくらい玉が出ないと、支援してもらえなくなるおそれがありまして、そういうところを是非今日は、重点を置くとするれば結局何なのというのを、いろいろ専門の分野の委員もいらっしゃるし、議員の先生方も、議員の先生方はそういうことがお仕事と私は認識しておりますので、何に重点を置くかを是非意見を伺わせていただきたいと思うわけでございます。

それからもう一つは、ここまでの北海道総合開発計画、大変いい意義を果たしてきたと私は確信しているんですけれども、やはりその基本的なトーンが、持っているものはすばらしい、我々はこんなに努力してきた、でも、こんなに条件が悪いんだから何とかしてよと、素朴に言ってしまおうとそうになっているんですけれども、例えばすばらしいとさ

れる北海道の観光資源、自然は人間がつくったものでもないから、素晴らしいことは間違いないんですが、観光資源がそれほど素晴らしいクオリティで今いるかというのに対する反省をして、その上でそれをさらにバーンと伸びるようなクオリティアップ、要するにどこかにまだ足りないところがあるぞと。それは決して人がやってくれないから足りないんじゃないで、自分たちが足りないんだというトーンをぜひ入れた方がいいと思うんですね。

食の安全、食のクオリティ、素晴らしいものがありますけれども、例えば安全性に対して、北海道独自の施策と制度を用いて、絶対的に日本のほかに比べて安全だと確信を持つようなルール体系を持っているかということ、私の知る範囲ではあまり伺わない。それから、素晴らしい素材はつくるだけけれども、それに付加価値を付けて、例えば料理として北海道の独自にまで高めているものがうんと多いかということ、必ずしもそうでもない。せっかくの素材、それを認めてくれないのはほかが悪いんだということではなくて、それを高めるために今はここをこうしようということを入れた方がいいと思うんです。そんなことでもいろんな委員の先生方のご意見を賜りたいと思っているところでございます。よろしく申し上げます。

【丹保分科会長】先生がおっしゃるように、やっぱりもう一皮むけないと先には行けないんだろうなと思いますね。それから、エネルギーもこの間まで石炭が日本を支えていたんですが、あの石炭が今出ている、日本が使っている全部のエネルギーの10%にもなるかならないかなんです。石炭を全部掘っても、日本のエネルギーはとても足りないぐらい、今、石油を無茶苦茶使っているんです。ですから、北海道、筑豊が出したとしても、それは本当に部分問題で、電力会社が多少は使いますけれども、そういう時代がとんでもなく動いている中で我々がどのように協働したらいいんだろうか。森林があったって、使っていなければならないと同じですから。ないと言っても、黙っていても炭酸ガスは吸いますけれども、その辺をどうするかという問題。要するに我々が次にどうするかという、今、家田先生がおっしゃったようなことをそれぞれがどう考えるかということですね。

生源寺先生、食べ物のお話ですぐ先生の顔を見ちゃうんですけども、その辺で、総論の部分で結構ですが、各論はまたご議論をいただきますけれども。

【生源寺委員】私も計画部会に参画しておりますので、資料2は何回も拝見しております。家田先生がおっしゃったことと少し重なるのかもしれませんが、少し切り口を変えてみたいと思います。

総論として、ある意味では総花になっているというのは仕方がないと思うんですけども、どこがどう変わるのか、どこが新しいのか、あるいはどこを捨てるのかを見やすくするためのブレーストーミングのようなことをとお考えいただいていた方がいいんですが、例えば産業の方は、こういう新しいことをやるということは割とはっきりわかると思うんですね。むしろ生活というか暮らし、私は札幌にしか住んだことがないので、農村部はもちろん通いましたが、住んだことはないのであれなのですが、札幌であれば札幌の典型的な生活が

あると思うんです。あるいは農村部にも典型的な生活がある。漁村部にもある。今回のこの計画で、典型的な生活のどこが変わることになるのかという観点からこれを読んでみると、結構パーツはあるような感じがするんですね。

さらに言いますと、世代によって意味のある部分、あるいはあまり関心のないところがあるのだと思うんです。高齢者、中高年、働き盛りの人、若い人、子ども、その年齢で見るとか、あるいは男女別ということもあるのかもしれませんが。そういう一人ひとりの暮らし方、あるいはコミュニティとしての生活のあり方という観点から見てこれを読み返してみると、結構おもしろい視点があるように感じました。そろそろ着地点も考えていくということになりますと、これをどうアピールするかという話になっていく場合に、これだけではなかなか伝わりにくいところがあるような気がいたします。

それからもう一つ、これは蛇足ですけども、開発という言葉、先ほど分科会長が質的な要素があるんだとお話しされておりました。つまり、量的な単なるグローだけではないということなのだろうと思います。それはまさにそのとおりなんですけれども、同時に、当たり前の話ですけども、ディベロップという言葉は他動詞で「開発する」という意味合いと自動詞で「発展する」という意味合いを両方持っているわけですね。例えばサステイナブル・ディベロップメントを「持続的な開発」と訳すのか、「持続的な発展」と訳すのか、結局、両方の意味があるわけですね。発展を手助けする開発というふうに考えると、ウエートはやはり発展の方に移ってきているのだと思うんですし、また、移るべきだと思うんです。日本語にしてみますと、開発あるいは発展という格好で、うまく両面のあるところを伝えきれないんですけども、元々はそういう意味合いがあったのだと思うんです。

【丹保分科会長】ほかにご発言いただく方はおいででございませんでしょうか。

後でも多分出てくると思うんですけども、人口が400万人に減る可能性があるんですね。そのときどうするのかという処方せんを今持っていないと、ただただ減っていくのうろろうしていることになりまますから。今の状態から先を外層的に見るような計画は、質的に大きく変換する時代にはもうできないと思うんです。そうすると、例えば北海道が380～390万人　私が生まれたころは北海道の人口は330万人ぐらいだったんです。今や560万人、倍近くあるんですね。400万人の人口の連中が札幌に200万近く集中して、残り200万人が北海道に分散しているという格好に多分なると思うんです。そのときどうやって生きていくのかというパターンが頭の中になければ、人間というのはイメージーションがなければ議論を進められないと思うんです。それがこの10年計画の中で、全部とは申しませんが、そういうことが頭の中にあって初めて今どこに手をつけようかという話ができるのだと思うんです。

そのときに、先ほど札幌と札幌でないところと申しましたけれども、高度な医療だとか、高度の金融をベースにしたり、外国に投資したり、そういう情報系の集積、場合によって

は新幹線の結節点みたいなのは札幌までしかないと思うんです。そこから先は札幌とどう組むかという話になって、まだ今のところ大都市にはそれだけの自覚が 今、下村局長がいらっしゃいますから悪いんですけども、都市がそういう自覚を持っていません。地方とどう組むか。どの都市の議論を見ても、やっぱり自分の都市をどうするかという議論を中心にしています。当然のことです。地方はまたそのときに、札幌へ行ったら高度医療があるよというので、年をとった人がどんどん札幌に集中してくる。自動的にそういうことは起こるんですけども、それが人口400万人になったときにどうなるのか。全部札幌が稼いでくれるのか。そうじゃないのならどうするのかということ議論してもらわないといけないと思うんですね。

その地方の話をするときに、やはりグローバルというのは、G7、G8のような国、日本は途中で追いつきましたけれども、過去100年、成長率が2%をほとんど超えていないんです。どんどん伸びているのは途上国が伸びている。今、途上国が伸びているのに日本が乗られるかどうかという、先ほどお話がありましたアジアをどうするかという話は、伸びている国と北海道がどうやって向き合うのかという話だと思うんです。先ほど森地先生が全体を考えないとおっしゃいました。東京は専らそれに乗ることができる、シンガポールは丸々乗っている、そのようなことをどのように我々は考えたらいいのだろうかということなんです。

ですから、総体的に言えば、グローバリゼーションというのは、恐らく30年か40年たてばどの国も全部日本と同じようになって、ペタッとフラットになってしまいますから、全然違う世界が発生すると思うんです。今はその途中経過だと思うんですね。途中経過で、G7、G8の国はもうフラットに自分になっているけれども、フラットにならない国々、途上国ですね。ディベロッピング・カントリーをどのように自分のアクティビティの中へ取り込んで、自分も少しはいい思いをしようかというのがいろんな世界のグローバリゼーションで、二極化だと思うんです。

そのときに北海道は何ができるのだろうか。でも、自動車の生産台数を見たら、あと30年たてば中国の生産台数は今の日本がつくっているものに確実に追いつきますよね。そうしたら、日本の自動車を中国が買うわけはありませんから。そうすると、日本は中国に何を売るんですか。同じ自動車を売るにしても、全然違う売り方をするようになると思いますね。そういうことをどのように考えるかということやっていかないと、今、目先にあるようなことだけを外層的に見ていたのでは、そのときそのときにうろろうろするしか多分ないので、やはり腹を据えてどう考えるか。

これは、移民問題なんかも完全にそういう問題だと思います。それは思想の問題、考え方の問題も含みますけれども、そういうことを含めて、2050年ぐらいはどうなっているのだろうか。2100年はとても想像つきませんが、そのときのことを考えながら2030年を考えるというのでないと、2030年だけを踏まえたのでは、とてもじゃ

ないけれども、考えられない状況に今入ってきているのだと思います。それが全体の意義とか戦略目標で、そのとき北海道はどうなっているのか。これはまだ十分議論し尽くしてはいませんが、南山部会長の下で皆さんに鋭意議論していただいていますので、その辺のことをもう一回整理することにいたしまして、下村局長さん、札幌は一番頼りにされている、北海道で唯一の集約型の空間ですから、何かご発言があったらいただきたいと思えます。

【上田委員代理（下村市民まちづくり局長）】市民まちづくり局長の下村でございます。現在、札幌市では議会が開催中ございまして、市長が出席できませんので、私が代理で出席させていただくことになりました。どうぞよろしくお願い致します。

これまでの分科会ですとか、計画部会の方に私も代理で何度か出させていただいたんですが、今の北海道の現状を的確にとらえた新しい計画のイメージがだんだんとバランスよく盛り込まれてきているなという印象を持ちました。これまで議論を重ねられた委員の皆様には、本当にこのご苦労に対して改めて感謝申し上げたいと思えます。

今、丹保分科会長からも振られたのですが、実は札幌市の名誉のために少しかだけ弁解をさせていただきますと、この間、計画部会で私の発言がちょっと誤解を与えてしまって申し訳なかったんですが、札幌市も長期総合計画はあることはあるのですが、時代の変化、世界の動きも、その座標の中で札幌の位置づけも大きく変化してきていまして、このスピードは非常に速い。ですから、従来のスパンでの長期総合計画の捉え方ではいけないので、今すぐ変えますとは言いませんが、そろそろ仕込み的な発想をどう持たたらいいかということを考えて始めています。

その中で、札幌市と周りの石狩管内の自治体の首長さんたちの認識の仕方も少し変わらなければ、北海道はどうしようもないのではないかなという認識がだんだん強くなってきました。現在、上田札幌市長の方から隣接の自治体の首長さんたちに、何でもかんでもこのまま札幌一極集中であってはいけないし、また、なぜそれが起こるかという、札幌に何でもかんでも揃っているからこういうことが起こるのですが、これをもっと分散させて、機能を分担して、それぞれの地域がそれぞれで自立できるというか、頑張れるような圏域をつくっていかないと、負の一極集中の方が機能的な一極集中より勝ってしまうという、この認識を深めていこうということで、今、隣接の首長さんたちにお声かけをして、率直な意見交換をしましょうと。こうしていけば、札幌に何でもかんでも集まって、動きがとれないという状況が少しは先延ばしできるのかなという認識で、今、テーブルを持とうかなということで話が進んでいます。

それから、本題の計画の戦略的目標のところ、この3つでどうだろうかという話があるんですが、私も今感じているのは、世界の動きというか、時代の流れが非常に速くなっているので、社会が大きく環境が、北海道以外の地域との差がどんどん変化していくのではないかと。環境も変化していく。こういうことにどう対応していくのかという視点が

少しあってもいいのではないかという気がします。国内においても、北海道と北海道以外の差というものは、今、北海道の中では札幌と札幌以外のところの差という形と非常に類似する形で起きていますので、それがどんどん速くもなってきましたし、環境の変化も速くなっていく。これについてどのように対応していくのかという認識論が少し入ってもいいのではないかという感じがしております。

あと、観光や何かのことについても、今札幌市が考えていること、取り組んでいることについては、今後の計画の進め方の中でお話しさせていただきたいと思います。

【丹保分科会長】この計画の戦略目標では、札幌をどうするかというのはちょっと遠慮して書いていないんですね。札幌をどうするかというと、ちょっと札幌に遠慮して、ほかの人は言いにくいところもあるのだと思いますが、やっぱり北海道を考えるとときには、札幌をどうするんだという話を議論しなければならないと思うんですね。

2つの極端な話があって、1つは札幌にドーンと集中させてしまえと。世界的に戦えるものは全部札幌へ集めようと。それで、札幌とどうリンクを組むかというのが1つのやり方です。それから、それぞれの圏域に相応に分散したらいいんじゃないかという考え方があります。それで、相応とは何だという議論がありますよね。そのことをやらないと、北海道の計画が多分できないので、札幌がどこまで戦わなければいけないのか、どこまで負担をかぶらなければいけないのか。

ソウルみたいに、人口の35%ぐらいを持っている首都があるわけですね。だからといって、韓国はほかがだめなわけでもありません。そうすると、札幌は200万ですから、400万時代になったら、50%集中になりますよね。そうしたら、分散しましょうという話はもうなくなってしましまして、全部札幌へ集めようと。それが札幌は困るなら、みんなでそこをお願いしながら、ほかで何かをしようという1つの極端な選択肢があると思うんです。そういう議論はまだ十分されていません。

ですから、これは総合計画の中でやっておかなければいけないし、札幌が自分で私が全部引き受けてあげますからとはよう言わんと思いますし、言いにくいでしょうから。その辺はいろんなことがあって、むしろ石狩管内だけではないですね。十勝も日高も全部入ります。高度医療をやろうと思ったら、北海道では札幌へ来るしかないんですね。だったら、その次の医療レベルをどうするかという話が出てきますし、もっと先へ行けば、保健婦さんの医療がたくさんあるわけですね。保健婦さんにかかるべき人が病院まで行く必要はないわけです。そういういろんなシステムを全体で組んだときに札幌はどうなるのか。

この前、お話にありましたが、十勝の人よりも札幌の1人当たりの個人所得は低いのだそうですね。それはやっぱりそういう仕掛けになっているのですから、それをどのように見るかという問題、これはぜひご議論の中で対応していただくしかないのだらうと思います。これはまた部会でご議論いただいて、農業ということになった場合に、じゃ、札幌は何をするのかという議論をここではあまりしていないんですね。これはぜひ大事なことで

すのでと思います。

それでは、総合的な話としてご発言いただく方、ほかにおいででございましょうか。

【相原委員】この議論の途中の経過を知らないで物を申すのも何なのですが、私は北海道の生まれ育ちですので、今のいわゆる産炭地を含めた部分と、漁業でとか、農業でとかいう産業の成り立ちの落差、ここを何とかしていきませんか、スタートラインがどうにも、将来的な部分はいいんですけれども、非常に難しいのかなと思います。

それと、道民に落ちてくる部分で言うと、あまりにも石炭産業の部分できた地域、空知管内のちょうど真ん中辺ですね。あそこが今どのような形で将来設計を持っていこうかというのが非常に不安定です。その意味では、道の計画のエリアの設定で集中的に見ていく、施策を講じていくという議論は今までにあったのかどうなのかちょっとお聞きしたいと思うんです。

【丹保分科会長】集中的にと申しますと、場所を……。

【相原委員】計画をつくるに当たってのエリアのことです。

【丹保分科会長】道の方は終始エリアですよ、企業は。ここではあまりエリアを細かくは出していなかったと思いますけれども、どうでしょう。全体でということで議論をしてきたと思いますので。

これは相原先生がおっしゃるように、やっぱりエリアによってもものすごく違うんですね。観光で言っても、井須委員がいらっしゃるところでは、羽幌のあたりを走ると廃屋がずらっと並んでいて、あれに観光に来る人がいるのかいないのかと思いますよね。それと、道南と投入されているマンパワーも違いますし、資金も違います。東へ行くと違いますね。それから、JRで走りますと、観光地の真ん中を走っても、JRの駅の軒は全部さびています。ということは、地域がJRの駅はJRがやるものだと思っているのだろうと思うんです。自分たちでペンキ塗りしようかとは思いませんね。これは北欧あたりの小さな国へ行ったら、どの駅でもペンキがしっかり塗られていない駅なんて見たことがありません。ですから、地域社会が完全に崩壊してしまっていますよね。

これは、いい、悪いじゃなくて、そういう縦割り社会の中で、JRはJRで面倒見なさいと。トマムだけ観光業者がいますから、観光業者が塗るんでしょうね。あそこの駅だけはちゃんと塗られていました。そういうようなことを見ていると、我々がいろんなことをやっていくときに、相当基本的な部分から考え方を立て直していかないと、官、民はあっても、パブリックという概念がないような、特に北海道はそれに近いところがありましたよね。官、官で来ましたから。そこをどうするかという話は非常に大きな話なのだろうと思います。

ぜひこれは、今、相原先生が言われたようなことをどのように我々は見えていくか、場所によっての問題ということもありますから。これは嵐田副知事がさっき話してくれたことがありますので、その辺もしっかり頭の中に置いて、お互いに意見交換しながら、補完的

に、1つの島をいじるのに国の計画や道の計画があるはずがありませんから、これをちゃんとそろえていくようなことでよろしいのかなと。そのためにこういう会合があるのだらうと思います。

もしよろしければ、総論でとまっているわけにはいきませんので、先へ行ってよろしゅうございますか。

それでは、第3章、第4章にいろいろ書いてございます。今もう既に出てきた産炭地の扱いをどうするかなんていう話、グローバルな自立と言っても、グローバルどころか、自分が立っていくことすら非常に難しい地域が北海道はあるわけですね。それなんかをどうしたらいいのか。本当に成長するつもりなんですか、成長できるんですか、これはどのように考えるんですかということ、あまりきれいごとでなくて議論しなくてはいけないと思うんです。それがないと、やっぱりまた計画だけつくって終わりかという話になってしまいますから、ぜひこの3章、4章のところあたりはきっちりとご意見をちょうだいできればと思います。

それでは、1点目は非常に乱暴なくくりをいたしました、2点目、各論は今の全体を見回した上で、こんな立て方で議論を進めていいでしょうか。もう既に相原委員から産炭地のところをどのように見るんだというポイントが出てきておりますので、それも頭の中に置いてご議論いただけたらと思います。どうでしょうか。

橋本委員は、一番元気のいい、お馬さんの走っている地帯ですから、あの辺のことを頭の中に置いて何か地域としての、先生の地域は恐らく道央で、しかも広さを持っていてという地域ですよ。もしこの中に書いてあることとの絡みでご発言がいただけたらと思います。書いていないことでも結構です。

【橋本委員】今日はありがとうございます。今、分科会長の方から日高の話がございましたので、そのことも含めてなんですけれども、北海道の全体的なことのイメージで、少し前後するかもしれませんが、話をさせていただきたいと思います。

やはり北海道の持つ魅力ですね。これは何度も発言をさせていただいていることではあるんですけれども、ほかの日本の地域にないすばらしさというものをどうやって守り、自然ですとか、そういう環境は守っていかねばいけない。ですが、食や観光、産業、そういったものをどうやって世界に発信していかねばいけないかというのは、北海道としては大変難しい立場にあるのかと思います。ただ、今もう既にそうですけれども、特に食の面についてはそうなんです、北海道はいずれ求められる地域になると思いますし、また、なっていかなければいけない大事な島だと私は思っております。

イメージとしては、いつも思うんですが、フランス、パリがあれだけの発展を遂げておりますけれども、地方もしっかりと農業や観光で確立されているというイメージを私はいつも北海道に抱きたいと思っております、これから札幌市と地方とのしっかりとした連携がもっと必要になってくると思うんです。北海道外から札幌圏内にもっと人口が増えて、

しかも、その力のある意味で利用しながら、地方には農業や食、そしてまた環境や観光といったものの力をどうやってつけていくかということ。

そしてもう一つは、子育てですとか、そういうことをする分においては北海道は申し分ない地域だと思うんですが、なかなか出生率が上がらない地域の1つでもあります。その1つはやはり地域医療、そして福祉や教育、そういったものにどうしても格差があるということだと思うんです。人口減少をしたからといって、そこが難しい状況だから札幌にということではなくて、その人口減少の前に、どうにかして地域の医療や福祉や教育をしっかりと受けられる環境をつくってあげられるか、そこで逆に田舎に住んでみたいという思いになってもらえるかという、どうやって北海道の魅力の環境づくりをしてあげるかというのがこれからの大きな課題でもあると思うんです。

もう一つは、私は馬産地で生まれ育った一人でありますけれども、ばんえい競馬がどうか今存続されています。北海道競馬も今回の競馬法改正によってシステムが少しずつ変わっていった、新たな展開を見据えていこうとしている大事な転換期なんですけれども、公営競技、ギャンブルとは言われながらも、今既に北海道の基幹産業の1つである馬なんです。馬の資源、馬の観光というのは北海道しかない部分でありますので、そのことの認識を道民がどのようにとらえて、そしてさらに馬産地も含めた中で地域の活性化を図っていくのかということが、この部分が何でもかんでも、先ほど分科会長がおっしゃられたように、ヨーロッパ、北欧では人がやってくれるというような意識はないと思うんです。その地域のすばらしさを、景観から全て、我が町、我が村をどうやって守っていくか、つくり上げていくかということは、花一つ植えるにしても気持ちがこもっていると思うんです。その部分もやはりこれからは行政と一体となって、北海道の隅々までそういった心が、私たちの北海道をどうやって持っていくのかということの意識づけもある意味では国のレベルの仕事だと私は思っております。その部分も今日は委員の先生方に意見を私自身が聞かせていただいて、これから道と国との中で、北海道の本当の意味でのあるべき姿を確立するためにやっていきたいと思っています。

【丹保分科会長】今度は、各論まで入っていただいているいろいろなお話をと思うんですが、今、橋本委員からお話がありました。札幌はそれなりに集中しているんなことができる。場合によっては縦割りといいましょうか、分業型で専門性を持ってやれるところなんです。地方の集落へ行きますと、専門性を持った人がそんなにいるはずがないんですね。そうすると、1人で二役とか三役をやらないと、その集落が成り立たない。特に500万の人口が350万とか400万に減ったら、集落を集約したって、その集約された集落に住んでいる人たちが相当のことをしないとイケない。郵便局長さんとお巡りさんが一緒にできるかどうか知りませんが、情報の拠点だとか、いろいろな物流の出入りとか、場合によっては、もし農業地域だったらマーケティングだとか、そういう2つ3つのことができるような空間があって、それが道の駅はあるんですけれども、鉄道の駅だったらそこ

に全部集中していけば、いろんな人がそこへ集落から出てきて仕事をする。そうなれば、非常に高次のトレーニングを受けた、これは女性に頼るしか僕はないと思うんですが、女性の方々の中で高度のトレーニングを受けた人がどうやって地域に住んでもらえるだろうかということが非常に大きな将来の北海道のパターンだと思うんですね。

そして、その人たちで、今、農業も幸いなことに女性の労働力を借りなくても大規模農業をやっているところは、亭主が働いて、奥さんはうちでコントロールするということが出来るようなことがありますから、農業の専門家でも、情報の専門家でも、そうなると今度は教育が大事で、1つしかできませんという、どこかの大学を4年間勉強しましたなんていうのでは役に立ちませんから、生涯教育で何回かいろんな必要なものを足していくというシステムがあって初めて集落ができる。だから、町に住んでいる人間よりも地方に住んでいる人たちの方がはるかに輻輳的に物が処理できて、場合によっては教育レベルも高いということにならないといけないのだから、そういうものを支えるようなシステムが北海道でつくれば、これは日本のリーディング・エリアになれるんですね。

私は北海道大学なんですけれども、クラーク先生から習ったことは、あそこから総合的に物を考える人たちが出てきた。そんなことが今北海道に求められているので、入学試験を突破して、個々の専門性を持った学部、学科を出るような連中は北海道にそんなにたくさんいるとは私は思えないんです。ですから、せっかくそういう大学を出て、コンピュータの後ろに座っているような役にならないで、みんなが集落の中で働くということが出来るような教育はどうしても要るのだらうと思います。

それが多分、札幌と札幌でない都市、札幌でないところは非常に高いレベルの文化を持っているということになり得るんじゃないかなとかねがね思っておりまして、人口低密度地帯の集落をどうやってつくるかというのは、何も冬になって除雪したくないから町へ集まれよという、そんな単純なものではなくて、集まることによって非常に高度な集落が構成されて、例えばある教育まではそこでできる。病院もある病気まではそこで診れる。そこで診れない人はどこか次のところへ移していくというようなネットワーク系がちゃんと構成できるので、末端の弱いネットワークなんていうのは役に立ちませんから。そこらあたりをぜひ我々は北海道をモデルにして、もし北海道でうまくいったらというのは、本州では神武天皇のころから、おれのうちからおまえのうちの間はここだなんて境でけんかをしているわけですよ。北海道はそれが無いんですから、多分いろんなことが出来るのだらうと。これはぜひぜひ全体の中で、そういうパイオニアワークを100年前にさかのぼって、もう一回次の100年のために北海道ができないかなと思います。

人口低密度における地域社会モデルの取り組みというのは、これの6ページにあります。高松参事官の方でいろんな議論をしていただいて、あまり大きくは取り上げていないんですけれども、多分こんなことで、実験都市というのはハードをつくるのではなくて、そういう人たちが集まるのにはどうしたらいいだらうか。また、そういう教育も要るんだ

ろうと思います。ですから、バイオエネルギーが要るからといって、バイオアルコールにストレートに短絡するんじゃなくて、バイオマスを使いながら、そうしたら、牛のうんこもバイオマスだと。ガスも出る、風力もある、そしてそれといろんなものをどうつなぐのだろうかと。

相当高度なローカルな判断ができる人たち、それを支える高等教育機関、大学研究所。恐らく北海道では教育研究機関は分散していますから、大学院レベルはいろんな地区の特性に応じてできるのであって、学部教育はまとめておいてもいいんですが、大学院は分散した方が私はいいのだろうと思います。そういういろんなことをこれから議論していったら、世界の大競争をしなければならない部分とそうでない部分で、いろんな2回目の教育、3回目の教育、それも中途半端な教育ではなくて、最初はコミュニティスクールみたいなもので基礎的な勉強をして、次はもう少し専門性を上げて、2つ目の専門性を持って、3つ目の必要なことを勉強して、3つか4つ持っていれば、一生、コミュニティの役に立つ仕事ができると思うんですね。そんなことを是非札幌と札幌でない地域では考えなければいけないのかなと思います。札幌はもう大きいですから、必要に応じてある大きさのものを猛烈に突っ走るグループがいたっていいと思うんです。地方には猛烈に突っ走るグループがいても、それを支えるシステムがないですね。だから、これはぜひこの各論の中でご議論いただきたいということで考えておりました。

ちょっと先に行ってしまって申し訳ないですが、実はここにあまり大きく書いていないんですが、ぜひそれは議論をさせていただきたいと思います。それが、観光にしても、そこへ行けばそういう集落があって、その地域のことをしっかり見ているんだ、特徴はこれなんだということを、自分で物をつくって、それを人に見せることができる集落ができれば、滞在型の観光だって成立するわけですね。だから、その基礎的な部分をつくらなくて看板だけ上げると、また計画をつくっただけじゃないと言われかねませんので、これは是非みんなでご議論いただけたらなと思います。

【見城委員】いろいろお話を伺わせていただいて、ありがとうございました。それから、この新たな計画の構成イメージもずっと拝読させていただき、また、ご説明をいただきまして、なさりたいこと、こうありたいということはわかりました。ですが、細かいことを読んでおりませんので、提言されているのに私の方が申し上げたら申し訳ないなと思うんですが、それを含めて3点ございます。

まず、外から北海道を見ましたときに一番魅力的なのは、温暖化の中で寒冷地であるということなんです。農業も寒冷地であるがゆえに、例えば農薬が少なくいいとか、虫の害も少ないとか、広大な面積で耕作できるということがございますので、どこか最初に北海道のよさとして、地球が温暖化していく中で、北海道も温暖化していくとは思いますが、でも、温暖化の中で寒冷地であると。これを1つ強く出していただきたいということです。

それによって、そのことが全て各論での食料の問題ですね。それと、例えばグリーン・ツーリズムもそうですが、もう少し世界へ広げまして、世界を対象にした観光といったときの大きな目玉になると思います。ですから、これを第一に再確認、外から見ると大変魅力的である部分の中にいる方は当然と思っている部分が多々あると思いますが、まずこれを前面に出していただきたいということです。

2番目は、先ほどからご議論が出ておりますが、私が北海道をお訪ねしたり、いろんな関係で何度も訪ねていく中で、拡散型か拠点型かということは、できることなら、北海道に住んでいるか、北海道に「ターンなり」ターンして、後々、北海道に住んで何かやってみようと考えたとしたら、この計画を読みましたときに、拡散型で行こうとしているのか

つまり、かつて日本が全て東京を中心に同じようなものをいっぱいつくろうとして失敗したのに、なおかつ小型札幌というか、そのように拡散していこうとするのか、それでしたら町として新たな形成をするところで自分が何ができるのかと考えますし、逆に拠点型でも、札幌があれば、あとは本当に人のいないようなところでも成り立つ地域づくりをするということがわかれば、それなりに何が自分ではできるかという行動に移れると思うんですね。ですから、できましたらそこを、拡散型でいった場合はこう、拠点型だったらこう、そのような目安を明確にした形での将来像をやっていただけたらと思うんです。

それから3点目は、私がこの資料2をずっと読ませていただいていた印象に残った言葉です。それが言葉だけに終わらないでほしいと思って丸をつけていたんですが、3ページの「食」で、「海外市場も視野に入れた競争力強化」「海外マーケット開拓拠点」とございますが、こういった海外へ行くということだけ考えるのでしょうか。例えば、逆に海外に耕作地を貸すというような考えはあるのでしょうか。そのような具体的なものもこれからもう少しご議論いただければと思います。

例えば林や森をつくるときに、学校林という考えを既に行っているところがございまして、全く北海道ではないところの学校の学校林を1つずつ植えてつくっていくとか、それは日本国土を対象にするのか、アジアとか、アフリカとか、ああいう砂漠地帯の学校の子どもたちにとっての学校林を例えば北海道につくっていくというような、その海外という言葉、グローバルという言葉の中に、来てもらう、売りたい、売り出すというそれだけではない、画期的にやっていく発想があるかどうか。

もう一つは東アジアも含めてですね。それから、森林整備のところ、今申し上げたそういう世界の子どもたちを対象にした学校林のようなものをつくろうというような、そういう世界とのつながりがあるか。

あと、エネルギーのところでは、バイオエタノールのところですが、こういったところもどれだけできるかわからないけれども、海外援助という形と、逆にバイオに関してはエネルギーを北海道がつくることで代替していけないだろうかとか、そんなことも考えました。

あと、グリーン・ツーリズムですが、日本中でこれも言っていますので、具体策がない限りは絵にかいたもちで、大変魅力的なようで魅力的ではないというふうになっていると思います。以上です。ありがとうございました。

【家田委員】2点ほど、出た問題にコメントさせていただこうと思います。

人口減少なんですけれども、北海道は日本の中では圧倒的に人口密度が低いわけですよ。これでこれから人口がもっと減りますから、人口密度は減るんですが、かといって、先進国の中でどえらく人口密度が小さくなってしまいうけではないんです。将来の北海道よりもっと人口密度の低い国なんて、先進国の中で幾らもあるわけですね。ところが、北海道のこれまでの開発の方針というのは、基本的には本州型の生活に何とか近づけようというスタイルで来たわけです。けれども、これから人口が減りますから、本州だってそういうスタイルではなくなるわけだから、北海道は率先して本州を追いかけるのではないスタイル、そしてこれは何もアラスカになれと言っているわけじゃないんですよ。明らかに先進国の中なんです。将来の北海道は中でもかなり人口密度が高い方なんです。したがって、それはソフトランディングを上手に、どんなに姿よくできるかという問題とまず認識した方がいいと思うわけであります。

もう一つは札幌の問題なんですけれども、やっぱりこれと同じスタイルの議論が常に、例えば関東の開発の計画は全国の中でどう位置づけるかとか、関東の中で東京都市圏をどう位置づけるかというときに常に出る話と同じなんですけれども、要は関東もしくは東京が伸びるとほかがうらやむ。うらやむからあまり描けない、こういうつくりですね。ランドデザインのときにも同じ議論だったんです。けれども、例えば北海道の札幌を見たときに、確かに人口こそ200万ある。いろんなものが北海道の中でこそ揃っているけれども、では、大連とか、要するに札幌よりちょっと北にあるあたりの拠点都市と比べてそんなに札幌はすごい機能が揃っているかといったら、大したことはないんですね。

けれども、本当はこれからサハリンあたりはどんどんいろんなものができるはずで、コルサコフとかユジノサハリンスクあたりの方が稚内に行きましょうなんて言っているのは全然論外で、もちろんそれはあっていいんですが、札幌に行ってがっちり消費を楽しんでこようとか、リゾートへ行ってこようとか、おいしいものを食べよう、このようになるのが北方型での拠点という意味で、別に僕はそれだけが大事とは思わないので、飛行機の距離でいけば、札幌と中国の中心部は何の問題点もないですから、十分に九州とやりとりできる力を持っているので、森地先生がおっしゃるんだけれども、北方の中での札幌の拠点性はまだ高め得るし、高めない限り北海道全体の拠点性はなくなるし、そのためには北海道の地図の中だけ見ている、札幌だけが偉くなるのは憎いというスタイルの発想を改めないと、やはりビビッドなものにならないと思うんですね。その2点だけちょっと付け加えさせていただきました。

【丹保分科会長】家田先生がおっしゃるように、人口の絶対数から言ったら、デンマー

クだとかノルウエーはほとんど同じ大きさを持っていますし、位置関係から言っても、北海道はもっと暖かいんですよ。雪こそ降りますけれども。ですから、何もハンディキャップはないんです。あるとすれば、東京の影に隠されてしまっている、シャドーアウトされているということで、スコットランドがどうしてだめになって、デンマークがあんなに元気がいいかというと、スコットランドはバイウエイ・オブ・ロンドンなんです。エジンバラに真っ直ぐ入っている国際線は北からちょっと入っているだけです。みんなロンドン経由です。日本も札幌へ真っ直ぐ入ってくる国際線はほとんどありません。これはバイウエイ・オブ・東京なんです。

ですから、東京と喧嘩しようとは全然思いませんけれども、今、家田先生がおっしゃったように東京と違う生き方をやれば、デンマークとスコットランドの差みたいなものはちゃんと出てくる。東京は物価が高いですから、稼げない者でももっと稼がなければいけない。でも、北海道はそんなに稼がなくてもちゃんとした暮らしができるとか、いろいろあると思うんですね。これはぜひこの計画の中でもうちょっと詰めていきたいなという気がします。ありがとうございました。

櫻庭委員、一番大事なお魚を扱っていただいております、北海道の大産業ですが、別にお魚でなくても結構ですから、どうぞご意見をください。

【櫻庭委員】私は今回初めて参画をさせていただきまして、この資料につきましても地元で多少説明を受けました。ただ、どういう環境の中で会議をされているのかよくわからなかったものですから、今日は黙って聞く側にさせていただこうと思っております。

ただ、浜の人間として、北海道の開発計画の中で浜の役割というのは何だろうかということをもう少し、私自身もそうですが、委員の皆様方にいろんな形で意見を聞きたいと思っています。そのためには、水産基本計画というものが水産庁にあるわけですから、そこら辺の係わりも出て参りますし、ここにも出ておりますが、港湾、港のことは漁港という表現をされているんですね。私ども漁民が見ていてどうも不思議だなと思うのは、港湾と漁港の違い、この辺のところはこれから北海道も同じような扱い方でいくのか、進捗の状況が非常に違うという状況があるわけですね。だから、その辺のところもこれからの計画の中でどうなるのか。

それから、海洋レジャーなんていうのはどこら辺に入っているのか、漁民との係わり、漁業との係わりの海洋レジャー、その辺のところもこれから具体的にになったときに、それ以外の計画の中に盛り込んでいただけるかなという思いをして聞いておりました。

【丹保分科会長】参事官、その辺の議論はどんなふうになっていますか。

【高松参事官】この中では、水産についても、供給力強化の視点で書かせていただいております。

【丹保分科会長】漁港と港湾というお話が今ちょっと出ましたけれども。

【高松参事官】漁港もこの水産供給の施設という考えのもと、ここで政策を取り上げてい

くという考えで整理をしております。

【丹保分科会長】ぜひ櫻庭委員にご意見をいただきたいのは、昆布もタラコも北海道でとれているのに、明太子を買ってくる。塩昆布を何で大阪に金を払わなければいけないんだろうとか、いろいろ思うところはございますね。しかも、いろいろ議論をしていくときに、農村はそれなりに集約化の絵は描けるんですね。漁村の場合、なかなか後背地、後ろのことがありまして、集約化したらどうなるか。漁船がうんと大きくなって、長距離を走れるならまた別なんでしょうけれども、その辺は陸にいる人間はあまりよくわからないんです。

ぜひご意見をいただいて、例えば太平洋岸の漁港、日本海側の漁港はどのようにして将来展開していったらいいんだろうか。ですから、多分、漁業だけではないと思います。それとエネルギーと農業とどうやって組んでいくんだろうかということで、冬場はもう農業はないわけですから、冬は働かないで済むという昔の北海道の単作地帯みたいなことはもうこれからできなくなりますよね。そうすると、冬はどうするんだという話も常に頭にございます。その辺もぜひご意見をいただきながら進めていきたいなと思います。

漁港が本当に10キロ置きに要るんだろうかという議論だってありますよね。避難港としては要るんでしょうけれども。そうすると、船の大きさがこのくらいだったら、このくらいなければという当然の常識もあると思うんです。ぜひそういうこともお聞かせいただいて、全体の中で北海道、先ほどお話がありましたような札幌と札幌でない地域というものをつくるときに、札幌でない地域に漁業関係はうんと集まりますよね。それをどうするかという話で、そういう大きな固まりで何かをするということは北海道はないですから。そうすると、どうしたらいいだろうかと。栽培業をやれば水質汚濁の問題が出ますし、その辺も陸とつないでやらなくてははいけませんから、ぜひご意見を、こんなふうにしたらどうと言っただけだと、みんなで議論ができるかなと思います。

井須委員、その辺のことを含めてご発言をお願いします。

【井須委員】それでは、丹保先生からご指名なので、お話ししたいと思いますが、この計画を見せていただきまして、全体に大変気配りよくまとまっておりまして、まだ未定稿ではありますが、すばらしいなと思いながら、さすがだなと思って敬服をして読ませていただきました。

ですから、何も付け足すとか、どうこうということではないのでありますけれども、細かいことでこれはどうなんだろうかと申し上げたいことがあるわけでございます。それは、2ページの「北海道の資源・特性」の中で、「アジアの中でも特徴的な優れた資源・特性」の中で、「広大な農地」という中の次のところですね。「風力、バイオマスなどの新エネルギーや勇払の天然ガス田」云々という項目がありますけれども、ここにぜひ私は太陽光というものを1つの北海道の資源として入れていただければと思うんです。

今、実は稚内では太陽光発電、これは南山委員さんの方が大変詳しいのでありますが、太陽光発電に国の事業として70億円を投じまして、広大な地域にパネルを並べて、そこ

で大規模太陽光発電実証実験装置、我々はメガソーラーという名前で言っているんですが、それが建設中なんです。これは北海道でなければ非常に条件が悪いということが1つあります。なぜかという、土地がただ同然ぐらいに安くて提供できるんだということです。これは太陽熱ではありませんで、太陽光発電でありますので、聞くところによりますと、年間の太陽光の累積量は東京と稚内とそんなに変わらないというんですね。これは稚内で成功すれば、全国どこでも成功するというところで実験が始まっているんです。

実際、長野県では30億円をかけてやっているわけでありますから、そういうこともありますので、これは北海道が非常に有利だなという感じもします。太陽光というのは地球上どこでもあまねく平等にあるはずですが、さて、それを実際に電気にするということになると、北海道のように広くて土地の安いところがいいんだという意味で、いかがなものでしょうかということです。

それから、これは提言ではないんですが、困ったことだなというのは、戦略的目標の中で少子高齢化はこの前も出ておりましたね。今、北海道内で少子化をどうするかということで議論するとき、赤ちゃんが産めるところ、要するに妊娠したお母さんが出産できるところは限られているんです。180の市町村のうち町村部は、私の知る限りどこも分娩できないんですね。市といったところでも、5つや6つの市は、根室市でさえ赤ちゃんを生むことができないんです。赤ちゃんが産めるところまで行くためには、北海道のあまりよくない道路を飛ばしていかないと、途中で生まれてしまう。北海道の道路というのは、少子高齢化を防ぐための手段なんだよということも我々はいつも地元では言っているんですが、そういう現実なんです。町村ではこれはちょっと深刻な話なんです、そういうこともあるということです。

今度、3ページの下に、先ほど森地先生からグローバルゼーションとか、いろんな話が海外との関係であったのですが、これは本当は櫻庭さんの方が詳しいのでありますが、実は今、中国から水産加工業に従事する人が入ってきています。例えば稚内市だけでも、そこに従事する人が160名も来ています。宗谷管内だけ入れると、240～250名になっているんです。よくわかりませんが、全道で恐らく1,000人近いと思いますよ。そして、これらの中国から来るのは、みんな若いお嬢さんばかりなんです。3年間の研修ということで来ているわけでありますが、この人たちが来なくなったら、実は水産加工業が成り立たないという深刻な状況になっているんです。こういうことがありまして、グローバルゼーションというのは、物とかいろんなことがあります、こういう人の行き来ということも非常に大切なことだということを頭の中に入れておかないと、北海道の産業はなかなか成り立たないんじゃないかなという感じがするわけであります。

それからいま一つ、これは前にも議論が出ましたけれども、北海道だけ独自の規制緩和ができないかということです。北海道の道路は本当に長いんだから、法定速度60キロというのはかわいそうでしょう。場合によっては、80キロぐらいは特別認めてもらえな

いものかということなんです。これはやっぱり提言を続けていただきたいと思うんです。道州制特区の中では実現不可能でないかもしれないという議論があります。そういうこともございますものですから、この辺も今後の議論としていかなものかなと私は考えているのでありますが、どうかよろしく願いたいと思います。

もう一つ、札幌一極集中の話が出ましたけれども、札幌市プール論というのがあるんですね。北海道の人口や何かをみんな札幌にためておいているから、北海道外に出ないんだと。私はどうも意味がよくわからないんですが、そんなプールみたいな淀んだ水が幾らたまったらしょうがないじゃないかと私は言っているんですけども、そういうことでは厳しいのではないかとということでもあります。以上でございます。

【丹保分科会長】北海道の交通規則の話は何回も出ていますし、これは書けるかどうか別ですけども、ちょっと頭の中に置いておいてくださいますかね。

【高松参事官】はい。

【丹保分科会長】ありがとうございました。

それから、ソーラーの話は1つ入れていただけますよね。例えばソーラーは日が照らないと発電しませんよね。ためておけません。だったら、大規模装置でためて、牛のうんこを集めてガス発電ができるようにしておくとか、そういうハイブリッドな計画をつくっていかないと、単目的の例えばソーラーだ、風力だというのはそんなに長持ちしないんですね。ですから、ぜひ大規模装置で牛のうんこをためておいて、日が照らないときはそれで供給するというようなフラットニングをしないと、南山会長は困るんですね。ですから、ぜひぜひそういう総合的なことを……。

【井須委員】今、蓄電池も研究しているんです。

【丹保分科会長】当然そうでしょうね。でも、牛のうんこというのは全国ゴロゴロいるわけですから、始末をするものとハイブリッドでどういうことができるか、やっぱり複合的なことをやっていかないと、単目的なことは幾らやっても、どこかに必ずアラが出ますよね。

【井須委員】あれは牛のメタンで、自家発電で農家の一家を賄っているという例はあるんです。ありますから、今後、おっしゃるとおり是非やっていただきたいと思います。

【丹保分科会長】ぜひぜひ。足りなければ、江差あたりからもどんどんうんこを運んできて、ソーラーとつないで、そういうシステムをつくるということが多分できるんだろうと思いますけれどもね。

どうも私の不手際といいますが、勝手なことを言っているうちに時間がたってしまいましたので、この辺で打ち切ってよろしゅうございましょうか。分科会でご意見をいただきながら、南山部会長のところで次々と新しく文字化していただくようになっておりますので、ここはフリーにお話をいただくということにしたいと思います。

加えて、南山委員からご発言はございますか。

【南山委員】特に改めて私から付け加えることはありません。いろいろご意見をいただいて、いろんな観点があるということは事実でありまして、今のお話がそのとおり全部ここに具現できるかわかりませんが、いろいろ考えさせていただきたいと思います。

【丹保分科会長】ありがとうございました。

それでは、これで一応議論は終わらせていただいて、この後の予定等についてお願いいたします。

【二見総務課長】今後の分科会の開催予定につきましてご説明させていただきます。

資料5をお配りしてございます。本日の後、計画部会の方で2回ほどご議論をさせていただこうと思っておりますが、当分科会といたしましては、次回は12月11日を予定しております。さらに来年になりますけれども、10回目が2月20日、11回目が3月19日に開催を予定しております。正式な開催のご案内につきましては、事務局を通じまして改めてご連絡をいたします。

事務局からは以上でございます。

【丹保分科会長】それでは、ちょっと時間をオーバーして申し訳ございませんが、終わりたいと思います。どうも今日はありがとうございました。次回またよろしく願います。

了